緑のまきば

1974.№11

小金井緑町教会
小金井市緑町四ー一六ー三三
電話〇四二三ー八一ー七九六一
編集 牧師 山本圭一

説教

墓標なき人生

（ヘブル11章8ー13）

山本圭一

召し

いくとせか生きることの苦楽を味った者は、人の一生が磐石のように不動でなかったと言うであろう。彼こそ理想にむち打たれ、過ぎこしかたの漂泊の夢にさいなまれる。かなたこなたに織りなすさまざまな人生の曲折に出会い、遍歴の旅は深い詠嘆を呼びます。

旅人とわが名呼ばれん初しぐれ

俳人芭蕉がこう歌い出た時、人生の実相を自然の中に観想し、ほのかな安堵とうつろい易い人間の悲しみを、初しぐれの冷やかさの中にじっと耐えていたのだろうか。

旅。それは宇宙の流転を伝え、旅の枕に浮び出る一種の救いを待ち望ませる。しかし、アブラハムがカルデヤのウルから旅に出た時彼を歩ませたものは、自然の衝迫でも運命の狂わしい波乱でもなかった。祝福に満ちた神の言。彼は約束の言葉の前に、旅を起した。（創世記12章1ー）彼の旅は信仰の旅であり、「神の召し」ただそれだけで充分であった。

信仰によって（ヘブル11章8）とはアブラハムの旅の飾り言葉ではなく、旅そのものであった。そして「行く先を知らないで」といわれる旅の不安と不知は、神の召しという根源的な動力の前に、それをむしろ一層味わい深くいろどる偉大な不知、栄光に映える不安とも言うべきか。だから二度と通ることのないこの日の旅も、すべて切ない初旅でありつゝ、神の厳そかな召しに貫かれ支えられる。

仮寓と、定住と

ヘブル書記者は、この旅の内側を三つの視点より展示する。

第一は「他国にいるようにして約束の地に宿り」（11章9）である。キリスト者は、たとい幸福の極地にあってもこの世に住みつけない。信仰の離島に立って文化の成果に眼を閉すのではない。神の言に定住することが、この世の仮寓を作り、自由の泉を酌ませる。

第二は「幕屋に住んだ」ということ。これは一見、仮寓と対立し定住を思わせる。人は不断に定住の夢を見て生きる。しかし彼は、この世に仮寓する自覚のゆえに、幕屋をたてて定住することの真意を理解している。さらには、この世に定住することによって、彼はいよいよその仮寓性を明らかにするように生きる。人生の動と静。真理の立体はこゝから開く。かって戦いの果てきらぬ時、北満の曠野に立って、とある感慨にふけったことがあった。それは戦乱の動の中に見た静と言うべきか。

目路はろかうまし国原　夏草の

そよぐが中に　汽車止りけり

人生を傍観せず、この動と静の中に、泥くさくとも生きんと思う。

神の都と、死と

第三は「同じ約束を継ぐイサク・ヤコブと共に」である。旅は独り旅によってはその真相を失う。耳をそばだててみるがよい。この言葉の背後にあのイスラエルの集団の旅が見える。あの教会の旅がかもし出す足音が聞えてくるではないか。イサクもヤコブもアブラハムのように、神の召しの前に歩き続けた。「共に」受け継ぐべきゆずりが神の約束であるならば、人はその前にめいめい立つことによって、神の民の真の原型は打ち立てられる。イサクやヤコブがアブラハムという秀れた人間に、導かれなかったところに、イスラエルの望みがあった。教会はそうしたゆずりの場所なのである。そして「彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を待ち望んだ。」

「これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。」神の都は、人の死を定位する。この言葉以外にわれらの墓標を飾るものはない。過ぎ去った人に贈るこれほど美しく深い言葉は、ほかにあるまい。神の約束と召しに始る旅が、幾多の曲折を経て、ついに死に至りついた時、この死が神の都の中に墓標すら止めずに終ったとしても、彼は神の都を望んで生き続ける。